



安養 ～弘願院だより～
撮影場所：弘願院本堂内より

ご挨拶

陽春の候、弘願院の檀信徒の皆さまにおかれましては、益々御健勝のこととお慶び申し上げます。

平素より弘願院の寺門興隆のため種々ご尽力賜り厚く御礼申し上げます。

この弘願院の広報誌「安養 ～弘願院だより～」を発行させていただき、様々な声をいただきました。

「安養 ～弘願院だより～」は檀信徒の皆さまのみならず地域の方や有縁の方にもお配りしております。多くの方に弘願院のこと、仏教や浄土宗のことを発信し、「敷居が高い」というお寺のイメージを和らげるよう努めてまいります。

春は新たな門出となる出会いの時期であると同時に別れの時期とも言われます。この世の中は常に移り変わる「無常」の世の中です。それは花もモノも我々人間も同じなのです。春の時期だからこそ感じられる様々な事象に目を向けて、新年度の始まりを迎えるにあたり1日1日大切にしていまいりましょう。

弘願院 森岡 達圭

新元号「令和（れいわ）」が発表されました

4月1日に新元号「令和」が発表されました。645年に定められた「大化」から始まりこの度5月1日より施行となる「令和」が248番目であります。明治以降は天皇在位と元号が一致するようになりましたが、それまでは大地震や火災、天変地異、疫病の流行などがあつたとき、改元を行うことで災いを断ち切り、新しい世の中を作ることを示す意味合いがあつたと言われていいます。

浄土宗を開かれた法然上人の時代も天災や飢饉、疫病で苦しむ人々が沢山おられました。そんな中どんな人でも平等に救われる教えはないのだろうかと思ひに悩まれ、「南無阿弥陀仏」とお念仏をとる者は誰でも阿弥陀如来様に救われていくという浄土宗の教えを確立されたのであります。新元号である「令和」はどのような時代になるのでしょうか。世の中が平和で争いごとも少なく、心豊かにお互いを思いあえる世の中であることを切に願うばかりです。

弘願院の山門に掲示板を設置しました

3月初旬に弘願院山門右横に掲示板を設置しました。



寺院専用の立派な掲示板はなかなか高価なため、ホームセンターで大きめのコルクボードと雨除けのビニールを用意し、立派な??掲示板の設置が完了しました。弘願院のすぐ側には観光寺院でもある妙立寺様(通称 忍者寺)、また、にし茶屋街に向かう方が弘願院の前をよく通られます。地域の方や、観光で金沢に来られた方にも行事の案内や「弘願院からのメッセージ」として様々な言葉を発信していきたいと思えます。

今までに2つの言葉を掲示しましたのでご紹介します。字は本当に恥ずかしく、見苦しいレベルのものです。少しでも早く上達するように日々精進します。



「思い通りという道はない」

「道」という字には人や車が通る「道」以外にも意味があります。それは仏さまの教えを指すこともあれば、物事の道理や道徳を指す場合もあるのです。

我々は自分の人生を主人公として歩んでいます。この目で見たと聞いたこと、学んだことを基準に周囲と関わりをもちますが、何事も自分の思うように物事が進むことを望み、そうならない時はすぐに腹をたててしまう、そんな我々ではないでしょうか。独り善がりの心がきっかけとなり、世の中では多くの事件も起きています。

自分自身への戒めも込めてこの言葉を書きました。他者を思いやる心を基に、「知識」ばかりを増やして頭を固くするのではなく、「智慧」の心を養い、柔軟に物事を考え、正しい「道」を歩めるように努めたいものです。



「同じ木で 先に散る花 残る花 行くも悲し 残るも辛し」

春は様々な花が寒い冬を乗り越えて綺麗な花を咲かせます。桜の花は春の花の代表であり、多くの方がこの時期に咲く桜を楽しみにしているのではないのでしょうか。桜のみならず我々は花が咲き誇る様子を楽しみにしがちですが、花に感情があったならば、散っていった花は何を思うか、また残された花はどのような思いなのでしょう。

我々人間も愛する人といつかは別れなければならない。また、愛する人を残していつかは旅立たないといけない。そんな「無常」の世の中を生活しているのです。

花が精一杯咲き誇り、やがて散っていく様子を見ながら、今ある命の尊さや儚さを今一度「有り難い」ものだと見つめなおす、この言葉がそう考えるきっかけになれば幸いです。

絹本地刺繍仏涅槃図の公開を行いました

お彼岸の期間中に弘願院の寺宝である絹本地刺繍仏涅槃図を本堂脇に掲げました。檀信徒の方や地域の方、約 **50** 名の方にお参りいただきました。また、涅槃図のみならず弘願院の阿弥陀様にもお参りいただけたことが何よりも嬉しかったです。本物を直接ご覧になると皆さま驚いておられました。この涅槃図は今後虫干しの時期（秋ごろ）や春のお彼岸の時期にまた公開予定です。



(その他の写真は弘願院のHPに掲載しております。)

ねはんず 涅槃図とは

お釈迦さまが涅槃（入滅）された時の様子が描かれたものです。涅槃とはサンスクリット語の「ニルヴァーナ」の音訳で、「煩惱の火が吹き消された状態の安らぎ、悟りの境地」を意味し、お釈迦さまの究極的な救いの境地を現す言葉です。

35歳で悟りを開かれてから伝道の旅を続けること45年、故郷に近いクシナガラという町の跋提河の岸边にある沙羅の樹の林で、頭を北にし、右脇を下にした形（頭北面西）で亡くなりました。（これに習って、仏式では亡くなった方を北枕にして寝かせます。）横たわっているお釈迦さまの周囲には嘆き悲しむお弟子さまや動物たちを描き、その典拠は『大般涅槃経』というお経に基づきます。

臨終にあたって最期の教えとして次のような言葉を残されたと言い伝えられています。



「あらゆるものは、うつろいやすいものである。（諸行無常）怠ることなく精進せよ」

軍記物語で有名な『平家物語』の冒頭にも「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。奢れる人も久からず、ただ春の夜の夢のごとし。猛き者も遂にはほろびぬ、偏ひとへに風の前の塵におなじ。」とございます。

お釈迦さまの時代と比べると昨今とても便利な世の中になりました。今はインターネットで知りたい情報がすぐに調べることができ、またそこにいない人と簡単に繋がることも可能です。（SNS等）。また、様々なことが機械化・自動化となりつつあります。例を出すと金沢駅の改札も自動改札になりました、、、（個人的には駅員さんと切符を介して互いに御礼を伝え合う、そんな何気ない会話が好きだったので、心の中は「(ノロノロ)シクシク…」のような思いです。)

今後は今ある仕事の一部も機械化やAI（人工知能）を搭載したロボットが担う、そんな話もあります。また医療もおおいに進歩しましたが、根本的な苦しみの原因ともいわれる四苦（生老病死）は昔も今も変わらない。この世に生を受けたものはやがて最期の時がやってくるのであります。また我々は六根という眼・耳・鼻・舌・身・意という様々な感覚器官があるからこそ生活できるのであります。裏を返せば、「もっといい景色が見たい」「もっと美味しいものを食べたい」というような欲望は果てることのないのであります。

そんな欲にまみれた私達のこと【阿弥陀如来】という仏さまは決して見捨てたりはしません。「南無阿弥陀仏」とわが名を呼ぶ者はみんな必ず救いとるぞと我々に約束してくださっているのです。お釈迦さまの最期の言葉にもある「怠ることなく精進せよ」とは我々におきましては平生からの南無阿弥陀仏のお念仏の一行であります。

目 教 えて！ わ かり に く い お 経 目

一、「同唱十念(どうしょう じゅうねん)」

お経って難しいイメージありませんか？

お経は耳で聞くことが多いと思います。文字ではなく耳で聞く事で余計にお経が難しく感じられます。法要の時はその連続ですから段々と上の瞼と下の瞼がひっついてくるというような状態になりがちであります。私も学生の頃は長いお経ですとそれだけ正座をする時間が長いので苦痛で仕方がありませんでした。

ですが意味がわかると段々と楽しくなってまいりました。その経験を活かし、この欄では御忌・施餓鬼・十夜等の弘願院で行われる法要や法事、月参りでおとなえするお経を少しでもわかりやすく解説してまいります。

そのシリーズ第一号としましてお経ではないのですが、「**同唱十念(どうしょう じゅうねん)**」を解説します。恥ずかしい話ではありますが、私は初めてこの言葉を耳で聞いた時、「どうしょう 十念」と聞こえてしまい、とても不安な気持ちになったことを思い出します。

この「同唱十念」とは、一緒に「南無阿弥陀仏」のお念仏を唱えましょうという合図、いわば掛け声なのです。他宗派でよく聞くのは「なまんだー」「なまんだぶ」ですが、浄土宗では下記のようにおとなえします。



なむあみだぶ なむあみだぶ なむあみだぶ なむあみだぶ
 なむあみだぶ なむあみだぶ なむあみだぶ なむあみだぶ
 なむあみだぶつ なーむあみだぶ



八遍目までは「なむあみだぶ」、ここで一度息継ぎをして、九遍目は「なむだみだぶつ」、最期の十遍目は「なーむあみだぶ」と少し抑揚をつけたりします。

お念仏の意味合いには種類がありますが、浄土宗では「称名念仏」といい、声に出してお念仏をとこなえることが大切であります。この「南無阿弥陀仏」は阿弥陀様のお名前を呼んでいるのです。この六文字には阿弥陀様が我々の代わりに永い間修行に励まれたその功德が詰まっています。「南無」とは「お願いします・おすがりします・助け給え・よろしくお願いします」という意味があります。「南無阿弥陀仏」とわが名を呼ぶ者（お念仏をとこなえる者）はみんな、命尽きた後は私（阿弥陀様）がいる【極楽浄土】という世界に救い取るぞ！と我々に約束してくださっているのです。

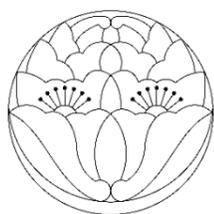
声を出すのは少し恥ずかしい気持ちもありますが、法要や月参りや法事で「同唱十念」と聞こえたり、お坊さんが「お十念」をとこなえ始めたら、一緒に心を込めて「南無阿弥陀仏」と十遍のお念仏をおとなえしましょう。

編集後記

今後この機関紙「安養」は発行の目安として偶数月の前半を基本といたします。

この度も文字が多くなってしまい申し訳ありませんでした。次回はなるべく見やすく・より分かりやすくを目指します。

発行者



浄土宗 安養山

弘願院

〒921-8031 石川県金沢市野町 1-3-87

Tel : (076) 243-8024 Fax: (076) 243-5165

mail : guganin.jodo@gmail.com

H P : https://www.guganin.net

Instagram : guganin.housenji.jodo

Twitter : @guganin1645



金沢市 弘願院

「安養～弘願院だより～」

第二号

発行年月日 2019年4月1日

発行者 安養山 弘願院

森岡 達圭